山中饒舌

上からのぞいて見ると水流の落下はすさまじいものです
羊歯の乱れてゐる葉を　吹き散らしながら
瀧の水ははるか瀧壷の中へまつさかさまにそそぎこんでゐます
僕の胸の中にはもう一人の僕がゐて
僕と同じやうにびつくりして
はじめは一本の水が次第に何本もに別れ
屈折しながら何本もが霧のやうになつて行く水流の落下に
みとれてゐるのです
彼の胸の中にはさらにもう一人の僕がゐて
腰をかがめ　手をのばし
さて　いよいよあいつが墜落するのか
と　つぶやいてゐるのです
彼はいきなり僕の目を見つめます
君の番だ　と言ふかの如くに
僕は自分では僕の番だとは思つてゐません
はげしいとどろきがはるか彼方の瀧壷からひびいて来ます
岩のあひだを青い水の棒が下り走る有様
はじめに三番目の僕が墜落して行き
軽身の彼は傷つくこともなく　その次に二番目の僕が
やや重く水流に乗りつつ瀧壷へ行くのだと思つてゐるのに
彼はいきなり僕の手をひつぱります
ああ　狂ひはじめた自我の脈絡
夜光草のやうに輝く岩肌の緑の苔
苔ではなくて羊歯の乱立の林
なめらかなれども強き意志の岩肌
激突は僕の肉体を思ふがままに　打ちくだき
僕は僕だけが時間の水流に巻きこまれ
墜落して行くのを知るのです
もう一人の僕は上の方からのぞきこんでゐます
心配さうにのぞきこんでゐて　その顔は青ざめて真面目です
彼は　さらにもう一人の僕と
顔をくつつけあはせて　僕の方を眺めてゐます
彼等はどういふことを考へてゐるのか
彼等は僕の姿を眺めてゐます
彼等二人の目にうつる僕が　どんどん小さくなつてゐます
木切れの吹き散るかの如き僕がどうなるのか僕にはわかりません
僕の胸の中のもう一人の僕にも　さらにその胸の中のもう一人の僕にも
どうなるのかはわからないはずです